

フィリピン大学看護学部との看護教育コラボレーション 第2報 マニラでのフィリピン大学看護学部との交流と学び

森下 路子¹・入山 茂美²・山崎真紀子¹

保健学研究 23(2): 61-66, 2011

(2011年4月3日受付)
(2011年6月24日受理)

【はじめに】

長崎大学医学部保健学科看護学専攻では、2007年2月からフィリピン大学看護学部を訪問し、交流を行ってきた^{1,2)}。今回、2009年度のフィリピン看護学実習に6名の学生が参加したため、看護教員3名が引率することとなった。教員・学生の9名は2010年2月22日から3月4日までマニラ市内に滞在し、共に多くの学びを得た。その時のスケジュールを表1に示す。ここでは、特にフィリピン大学看護学部との交流で得た学びを中心に報告する。

フィリピン大学との交流では、まず、学生と共に大学病院を見学し、さらに病院での学生実習の状況を見学した。大学では1年次生の講義を見学し、感動的なキャンドルサービスを見学し、さらに学生同士交流する機会を得た。地域看護では、保健センターなどの地域保健活動を見学し、その時所長から講義を受け、フィリピンの地域保健の実情を学んだ。その後、国際看護学実習で地域

看護の実習ができるかどうかを模索すべく、著者の一人が、フィリピン大学の地域看護学実習の学生と行動をともにし、家庭訪問などの実際の実習を見学することができた。以下、大学病院での実習状況、大学の講義等、地域看護の状況の順に報告する。



図1. フィリピン大学の看護学部の先生方と

表1. 23年度フィリピン看護学実習のスケジュール

日目	月日(曜日)	
1	2/22(月)	福岡→フィリピンマニラに到着
2	2/23(火)	サンラザロ病院見学・実習
3	2/24(水)	サンラザロ病院見学・実習
4	2/25(木)	フィリピン大学看護学部の見学(講義・戴帽式等の見学、学生交流を含む)
5	2/26(金)	午前:フィリピン大学看護学部病棟実習の見学 午後:フィリピン総合病院見学
6	2/27(土)	午前:マザーテレサの家見学・実習 午後:フリー(学生の疲れが見られたため)
7	2/28(日)	自由行動
8	3/1(月)	保健省の見学およびJICA職員についてJICAの母子保健政策講義 午後:マザーテレサの家見学・実習 (森下:ストリートチルドレン支援NPOの見学)
9	3/2(火)	午前:コミュニティケアの見学 午後:学生、看護学演習の見学 教員は表敬訪問および教員との交流
10	3/3(水)	母子フェベリア病院にて妊産婦および新生児のケア見学 (森下:学生の地域看護学実習見学)
11	3/4(木)	フィリピン→日本へ帰国

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻

2 名古屋大学医学部保健学科看護学専攻

【大学病院での実習状況】

大学病院の神経疾患病棟での看護学生実習を朝7時30分から10時まで見学した。その実習は、10名の3年次生の学生に対し、1名の大学教員であるインストラクターが対応していた。朝の注射の薬品を準備した学生が、インストラクターから、患者のアセスメント、薬の効能と副作用などの質問を次々と受け、その場で解答を行い、指導を受けていた。4年次生の看護学生も実習しており、彼らは3年次生の看護学生を指導して、準備から実際の医療行為までの一連の流れを一緒に実施していた。インストラクターは、「4年次生に学生指導を任せられる」と言われており、インストラクターも4年次生も自信を持って指導している様子が伺えた。本学学生の感想では、4年次生はまるでインストラクターのごとく見え、非常に「格好よく見えた」と述べていた。また、日本で医療行為に当たるケアを看護学生が実施しており、カルチャーショックを味わったようである。

実習中のカンファレンスに学生ともども参加した。フィリピン学生の輪の中に、私たち教員も含めて入りカンファレンスが始まった。指導教官から、隣にいる日本人学生に自分の患者のアセスメントを説明するようと言われると、堰を切ったように英語で説明が一斉に始まった。フィリピン学生から1対1で受け持ち患者の説明を受け、自信を持って説明しているフィリピン学生の様子に、長崎大学の学生は非常に驚いていた。後に学生は、フィリピンの看護学生の演習を見学することになるのだが、自分たちと同じような演習風景で、同じ手順で学んでいることに気が付いた。違っていたのは、2年次生であるにもかかわらず、ケアの目的・手順を堂々と説明をしながら演習をしているというところであった。このことから、本学学生は、フィリピン学生の勉強に積極的な姿勢が、実習の時の自信につながっていると考えたようである。私たち教員もフィリピン看護学生からの説明を学生と同じように受け、改めて、フィリピン大学看護学部における看護教育のレベルの高さに圧倒された。

【大学での講義】

1年次生の講義「人間成長発達論」の中の「家族の課題」を、途中から見学した。80名という大人数であるにもかかわらず、一方通行ではない授業が展開していた。まず講師の呼びかけによる質問に対し全員が反応して答えていた。教室の空気の全体が動いている感じがした。圧巻だったのは、教室の真ん中で左右に分けて2つのグループを作り、問題を抱えている家族のロールプレイをするという場面であった。その場で二つの大きなグループができ、大人数が何重かの輪になって話し合いが行われ、15分程度で役作りと役担当者が決まり、早速ロールプレイが実演された。最初のグループは、結核を持つ年老いた父親を、子ども達が誰も自分のことで精一杯で面倒をみないという設定であり、子ども役が、勉強で、仕

事で面倒がみられない状況をそれぞれ好演していた。そのたびに笑いが起こっていた。次は、小児麻痺の障害児のいる家族で、権力の強い父親、障害児にかかりきりの母親、放置されて非行に走り妊娠している娘、それを母親のせいにして怒り狂う父親、それに対し母親が反論して喧嘩になるというバラバラの家族の設定であった。障害児の演技などすべての学生の演技は臨場感あふれ、生活の実体験が豊富であることを示唆していた。笑いが絶えず、楽しく学んでいる様子が伺えた。終了後、ロールプレイからの学びを、教員が呼びかけ、学生全員が反応し、それを教員が板書してまとめていた。この時の本学学生の記録には、学生の積極的な学ぶ姿勢に圧倒されたなど書かれていた。

【キャンドルサービスの見学】

キャンドルサービスを学生ともども見学した。実習に出る前の学生ということで2年次生ではないかと思われた。戴帽ではなくバッジを一人一人につける式典であった。学生が紹介され、本人と家族が壇上に上がり、バッジをツーザン看護学部長から保護者が受け取って、本人につけるというものである。三者が和気あいあいとしていて、保護者の誇らしげな顔が印象的であった。その後、キャンドルサービスがあり、厳粛な式典の後、今までの学生生活が軽快な音楽とともに写真の連射で流れ、クラス全体で多くの経験をし、皆で生活を楽しんでいる様子が見られた。演習中の風景もあった。保護者ともども今までの学生生活を振り返ることで、今後の実習のモチベーションを高める効果が非常に発揮されていると思われた。本学学生もとても感動したと言っていた。

【マニラ市郊外の地域保健活動の見学】

マニラ市郊外の、実習地域として連携のある保健センターを2箇所、学生と一緒に案内してもらった。フィリピンの保健センターは、アメリカ方式であるため、プライマリ・メディカルケアもあわせて実施している。最初



図2. 地域看護学実習中の学生と本学学生との交流
(保健センターの入り口)



図3. バランガイ（保健センターの入り口）



図4. 保健センター内の掲示板：歯科保健のポスター

の基幹保健センターでは、ちょうど糖尿病クリニックの診療中であり、多くの患者が受診していた。別の曜日では循環器クリニックも開催されている。センター長より、健康保険制度の加入者を広めるため「インスタンス・プロジェクト」を実施しており、成果が上がっているとのことであった。健康保険料が高く健康保険に加入できない地域住民を対象として、健康保険料の月払い制度を導入し、1回でも保険料を払い加入すると、保健所の診察や予防接種などが無料で受けられ、歯科サービスなどは半額になるという仕組みであった。そのため割安感があって加入者が急激に増加しているという。予防接種は、前日、他の病院で予防接種窓口を見学したが、子供だけでなく大人も受けていて混雑しており、最近では都市部でマラリア、狂犬病などの予防接種率が高くなっていると言われ、かなり普及している様子が伺えた。マニラ近郊では予防接種に対する意識が高くなっているため、このようなサービスがあると健康保険に入る動機付けになるだろうと思われた。予防接種率の高さも「インスタンス・プロジェクト」の効果かもしれないと思った。「インスタンス・プロジェクト」は、保健センター利用者や、家庭訪問時など、人と接するときに必ず勧誘しており、それも広がった理由のひとつだと考える。このプロジェクトは他地域でも広がりつつあると言われた。さらに「レインボーテント」の説明を受けた。「レインボーテント」は持ち運び自由なテントを用い、学校の運動場、地域の広場、教会前の広場などで、10歳以上を対象に、性教育・エイズ・歯科保健など14の項目の健康教育を実施している。

保健センターは図5のような管轄地域地図を作っており、その中に重症患者、低栄養の乳児、肥満などの健康課題を持つ家を塗り分けていた。このようなきめ細かい地域把握をしていることに学生は感心をし、保健センターが地域住民の健康に貢献していることを把握していた。保健センターの職員はドクター、助産師、栄養士などであり、高校卒業後2年間の教育を受けている助産師が地域保健の要となっていた。



図5. 保健センター管轄の住宅地図

【フィリピン大学看護学生の地域看護学実習】

地域看護実習に赴くフィリピン看護学生は朝6時50分大学に集合し、庶民の足である相乗りタクシーに50分ほど乗って実習地区に行った。著者の一人がそれに同行した。大学から高層ビルの立つ中心街を過ぎ、貧民街を通り抜けて郊外の実習地区に赴いた。実習地区は前日見学した保健センターの管轄地域である。フィリピン看護学生は1保健センターに6名程度で、2人で1地区を担当しており、その地区は通りをはさんだ1区画50世帯程度の大きさであった。通りに面した家は比較的大きく外観は綺麗であったが、その通りから1歩入り込む小道では、水が溜まっているところがあり、板を水溜りの上に渡して歩けるようにしていた。学生によると雨期では膝までつかるということであり、そのときは、家の土間には水が入るだろうと思われた。訪問時は乾期であり、乾期の時期でも水はけが悪いことを示していた。

学生は高血圧者のリストを持っていて、その地区の該当する人の中から3名をピックアップし、留守を除く2名の家庭訪問を実施した(図6)。訪問した家では、家の入り口の土間を抜けて部屋の入り口に座って血圧を測定しながら情報を集め、タガログ語で指導をしていた。



図6. 看護学生の家庭訪問

土間に犬がいたため著者は入ることができなかったが、犬は部外者に対し吠え続けていた。そのあと、チラシを使ってインスランス・プロジェクトを説明していた。学生は、地域に向いたときに必ず先に公民館に行き、公民館を管理している地域保健スタッフ（専門職ではない民間のボランティア）に声をかけ、この地区に訪問に入る了解を取り付けていた（図7）。さらに情報の交換をおこなっていた。これらは、毎回必ず実施していると言われた。その情報交換の様子から学生が地域スタッフから信頼され、時には指導している様でもあった。また、日陰で涼んでいる母児のグループにも声をかけ、乳児や母親の健康状態を聞いているようであった（図8）。そのような家庭訪問の状況は、学生であったものの、筆者に日本のかつての保健師活動を思い起こさせた。

学生の臨地での実習は8時から午前中のみであった。訪問が終了したグループは保健センターに戻り、保健センターでは担当教員が待機していて、早いものから順次訪問の報告があり、全員がそろった時点でカンファレンスが行われていた。

午前中のみの実習の理由は、付き添ってみて分かったことだが、2月末から3月になると気温が上昇していて、日の当たるところを避けて歩いても気温が高く水分補給を必要とする状態であり、1日の実習はとても無理だと思われた。また、犬を飼っている家が比較的多いことから、地域に向くには狂犬病の注射が必須であると思われた。この季節は蚊が少なく、日本の外務省の情報でもマニラ周辺ではマラリアの汚染も比較的少ないと言われていることから、衛生上からは、時期を考慮すれば、今後の学生の地域看護学実習の可能性があるのでないかと思われた。しかし、フィリピンで実際に訪問をしているのは看護学生であり、保健センターの職員は助産師が中心でセンター内の業務に追われ、ほとんど訪問をしていないため、その点が問題となると考える。今後学生の実習場所として確保するためには、十分な情報の収集と準備が必要と考える。



図7. 公民館を管理している地域保健スタッフとフィリピン看護学生（右側）



図8. 子どもたちを迎えに来ている母親たちと学生（右端）

【終わりに】

フィリピン大学に関わる実習内容で、特に印象に強いことを上記でまとめたが、今回のフィリピン実習では、それ以外に消化しきれないほど多くのことを、学生だけでなく私たち教員も経験した。それは、中心街の下町のストリートチルドレンの多さであり、マカティのような近代的な高層ビルが建ち並んでいるところであり、アジア最大のショッピングモールであり、コレギドール島の第二次大戦の日米の激しい戦争の跡であり、マザーテレサの施設の非常に清潔な行き届いたケアであり、多くの看護学生が白衣で街中に行き来していることであった。その学びを今振り返ってみると、私たちが一番学んだものは、ただ異文化を理解するというのではなく、異文化理解の中から、私たちが忘れていたものを思い起こさせてくれるような強烈なメッセージを得たことだと思う。その強烈なメッセージとは、フィリピンの看護の先生方の看護や教育に対するプライドであり自信であり、看護学生の目的を持った生き生きとした態度であり、街中の貧しいけれども活気にあふれている様子であった。私たち教員と同様に学生も多くのカルチャーショックを受けており、フィリピンの学生の態度から自分たちを振り返り、自分たちのこれからを考えたのではないかと思う。



図9. 第2次大戦で日米が激突したコレギドール島のマッカーサーの上陸地点（像はマッカーサー将軍）

本事業は長崎大学高度化推進経費、国際交流事業の助成金を得て実施されたものであり、このような機会を与えられたことを深く感謝する、さらにフィリピンで私たちを受け入れてくださったフィリピン大学のツーザン看護学部長、バラバグノ教授、ドーン教授をはじめ関係各位に深謝する。

文献

- 1) 入山茂美, 大石和代, 松本 正: フィリピン看護学実習の評価, インターナショナルナーシングレビュー, 30 (10), 88-90, 2007
- 2) 1) 入山茂美, 大石和代, 松本 正: 途上国における看護学実習のための事前学習の検討-フィリピン看護学実習の事前学習を振り返って, 看護教育, 49 (2), 144-148, 2008

Collaboration for Nursing Education Between University
of the Philippines and Nagasaki University
No.2 The effect of the collaboration at Manila

Michiko MORISHITA¹, Shigemi IRIYAMA², Makiko YAMASAKI¹

1 Department of Nursing, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

2 Department of Nursing, Nagoya University of Health sciences

Received 3 April 2011

Accepted 24 June 2011